



負けに不思議の負けなし



いよいよ今週末から多くの部活動で、2年半の集大成である地区総体、コンクール・競技会が始まります。最後の総仕上げの時です。

みなさんは、「勝ちに不思議の勝ちあり 負けに不思議の負けなし」という文言を知っていますか？元プロ野球の選手、監督として活躍した野村克也さんという人がよく使い、広く知られるようになった文言です。元は、江戸時代の長崎県平戸藩（現在の平戸市）の9代藩主、松浦静山（せいざん）の言葉だそうです。静山が書いた剣術の指南書「剣談（けんたん）」の中にある言葉といわれています。たまたま運よく理由なしに勝つことはあっても、負けたときには必ず負ける理由があるということです。勝ちも偶然に勝つことがあり、勝ったからといっても、負けにつながる要素を反省し、謙虚に受け止めなければならない。一方、負けを「運が悪か

った」と片付けるのではなく、失敗には必ず原因があるのだから、それを見つけて反省し、次に生かすことが大切だということです。

残された練習時間の中で、これまでに顧問の先生やコーチに指摘されたチームや個人の課題（負けにつながる要素）を一つ一つなくしていきましょう。特にチーム競技では、チーム全員が同じ方向を向いて頑張ることが必要です。チームとして頑張ること、約束事を話し合い、合い言葉にして練習を積み重ねてください。

そして試合に臨むみなさんに、心に留めておいてほしいことがあります。誰でも試合で勝ちたいと思います。最高の記録を残したいと思います。そんな時、人間は気合いを入れます。もちろん、これはよいことなのですが、気持ちが先走って、すごいプレーをしようとして焦ってしまい、自分に過剰なプレッシャーをかけてしまうことがよくあります。むしろ、「自分がすべきこと」「当たり前なこと」に意識を集中する方が、勝利につながる人が多いのです。

「素晴らしいプレーをしたチームが勝つのではない。すべきプレーをしたチームが勝つのだ」

（イチロー）

「当たり前なことを当たり前にするのが、実は一番のスーパープレーだと思っています」

（サッカー元日本代表 中山雅史）

去年の「浦島伝説」第11号でも同じ事を書きましたが、ぜひ、今年もみなさんに実行してほしいことがあります。「自分がすべきこと」を文字にして、いつも目につくところに貼り付けておいてください。よく、帽子の裏やラケットに「努力」とか「根性」などと書きます。これも大事なのですが、もっと具体的に細かな自分がすべきこと（チェックポイント）を書くのです。例えば「ボールから絶対に目を離さない」とか「左肩を開かない」「一球ごとに声をかける」など。そうすれば、プレーの最中でも目に入るため、試合中に修正することができます。みなさんの「すべきプレー」「当たり前なこと」ができれば、必ず勝てるとは限りません。相手は、みなさんよりも多くの練習を積み重ねているかもしれないからです。しかし、みなさんの「すべきプレー」「当たり前なこと」ができれば、勝つ確率は、できない場合よりはるかに高くなることは間違いありません。

各部で目標は違いますが、それぞれの目標が達成できるよう、最後の仕上げに取り組んでください。特に3年生は、悔いのないプレーをして、よい思い出を残してほしいと思います。全力を出し切って、燃え尽きてください。

そして、マナー（態度）も試合結果以上に重要です。試合中はもちろん、試合の待ち時間や休憩時間も含めて、多くの人目で見られ、詫間中学校として評価されています。勝っても、マナーが悪いために非難される人・チームがあります。一方、負けても褒（ほ）められる人・チームもあります。その原因のほとんどが、マナーです。詫中生の爽（さわ）やかなマナーを見せてください。